# 戦後日本の大学における運動部の教育的位置付けの変容
## -神戸大学体育会を事例として-

西原昂志

キーワード：2 本の柱, 理念, 教育的効果

1. 研究の動機

大学では、中学、高校と違い学校と体育会がどのように関わり合っているのかということや、教育的位置付けがわかりにくいため、その点を明らかにし自分が将来教師となった時にそれらの知識を活かしたいと思ったのが動機である。神戸大学を選んだ理由としては、この大学が他大学との合併や法人化など、大きく学校の体制が変わる機会があったため、学校と体育会がどのように影響を受けあったのかを明確に捉えることができると考えたからである。

2. 研究の目的と意義

この研究の意義としては、体育系の運動部が所属している学生に対して教育的にどのような影響を与えているのかを考察し、今後の大学の体育会のあり方を検討する有用な手がかりを示すことが挙げられる。神戸大学体育会に着目し、戦後どのような変化、発展をしてきたのかを解明し、現在どのような役割を担っているのかを明らかにすることを本研究の目的とする。

3. 先行研究の検討

戦後の運動部についての先行研究については、中澤による「運動部活動の戦後と現在-なぜスポーツは学校教育と結び付けられるか」（2014）がある。しかし、この研究での「運動部」は野球部、サッカー部などといった各スポーツのまとまりを指しており、本研究で扱う「運動部」のような各団体の総括役としての意味ではないため、本研究とは趣旨が異なると言える。

4. 研究の課題と方法

本研究では、神戸大体育会の公式に出版している冊子「六甲」、関係者からの聞き取り、当時の学生新聞等の一次史料を用いて、下記 4 点を検討することを課題とする。

1）神戸大学体育会の設立（第 1 章）

神戸大学の体育会が組織として活動し始めた時代について、次の 2 点から検討する。

（1）神戸大学体育会の設立の背景

（2）神戸大学体育会の構成

2）神戸大学体育会の展開（第 2 章）

神戸大学体育会が設立後どのように展開していったかを次の 2 点から解明していく。

（1）神戸大学体育会の行っていた事業

（2）神戸大学体育会の活動の変遷

3）神戸大学体育会の変質（第 3 章）

神戸大学の体育会の活動について、全学生向けの事業数が減った時代について、次の 3 点から検討する。

（1）神戸大学体育会変質の原因

（2）当時の神戸大学体育会の理念

4）神戸大学体育会の現在（第 4 章）

現在の神戸大学の体育会について、次の 2 点から検討する。

（1）現在の神戸大学体育会の活動

（2）現在の神戸大学体育会の理念

結論部では、神戸大学体育会の例から、今後の大学体育会のあり方を考察し、他の教育現場でどのように活用すべきかを評価する。

5.本論

5.1 神戸大学体育会の設立

当時、神戸大学の全運動部を束ねて連絡

を取り合うような組織はあったようだが、運動部だけではなく、神戸大学の全学生に対して、スポーツに親しみ、継続してもらいたいという狙いから、運動総部から大きく役割を変えた組織である体育会が生まれた。体育会役員は顧問、幹事長、副幹事長、常任幹事、幹事、本部員に分かれて仕事を行っていた。

5.2 神戸大学体育会の展開

当時の体育会は、「神大人のスポーツの振興」と「運動部の活動の促進」という 2 つの柱を活動の原点とし、体育祭、ボートレース大会、スキー講習会などといったスポーツイベントの開催や、近畿地区国立大学体育大会や旧三商大戦の開催、神戸大学の施設管理や運動部関係の金銭管理などを行っていた。しかし、年を経るごとにスポーツイベントの開催は数を減らし、活動は縮小していった。

5.3 神戸大学体育会の変容

体育会の活動の変容の原因としては、2 つあり、1 つは財政問題、もう 1 つは常任幹事会と各運動部との遊離であった。財政問題については体育会の徴収や後援会の設立、体育会主催のコンサートなどの解決策が考えられたが、どれも実行されなかったか、実行されても結果には結びつかなかった。常任幹事会と各運動部の遊離については、事務仕事を他の役職に任せ、各運動部に対するアプローチをもっと丁寧に行えるようにしたが、実を結ばなかった。このように活動を変容させていた体育会であったが、その活動理念も変容していた。当時は神戸大学自体がグローバル化についての重要性を深く見出しており、体育会もその校風になぞらえた理念を打ち出していた。また、運動部に所属することで大学という教育機関に付属する組織としてふさわしい教育的効果も認められていた。

5.4 現在の神戸大学体育会

現在の体育会は幹事長、財務、渉外、広報、総務の 5 つの役職に分かれて仕事を行っている。本部役員は 10 人となっており、これは体育会創設時の役員の 3 分の 1 ほどの規模である。以前のようにスポーツイベントの開催は行っておらず、あくまで運動部の活動の補助のみにとどまっている。体育会誌の「六甲」もその内容が変わっている。創刊当時は体育会が直面している問題や体育会という組織の紹介、体育会の活動の内容などが記載されていたが、現在は体育科幹事長の言葉、体育会本部役員の紹介、応援団からの言葉、体育会所属団体・活動紹介、体育会規約、学歌、編集後記と言った、非常に淡白な内容になっている。しかし、運動部に所属することで教育的な効果をもたらし、奨励していることから、体育会が伝統的に掲げてきた理念、ヴィジョンを守ろうとしている。

6.結論

このように神戸大学体育会は、時代の変遷や環境の変化に影響を受けながら、その役割や理念を変化・適応しながら今日まで活動を続けてきた。財政問題や認知度の問題もあった中、あくまで学生スポーツの範囲内での解決策を立てていたことや、神戸大学自体の教育方針になぞらえた体育会理念を掲げているところに、そういった活動の基盤となっている考え方が見て取ることができる。

結局、各種問題は解決し切ることができずに、イベント開催の規模の縮小を余儀なくされてしまったわけだが、現在の体育会の役割である「各運動部の援助」というのは運動部全体には浸透してはいない。体育会の現在を全神大生に向けてより一層アピールすることが、これまでの体育会の方針を損なわずに、なおかつ多面的な問題解決の手段である、と考えることができる。また、こういった学生の自主性に対する周囲（主に学校側）の対応というのは大学に限った話ではなく、小・中・高すべての教育機関に当てはめることのできるものだ、と結論づける。